



## 学生と学校を応援

後援会会長 原田新士



昨年度に引き続き、会長を務めさせていただきます。いろいろ至らない点もありますが、みなさんに助けられて進めていきたいと思えます。よろしくお祈りします。

先日も後援会の役員のみなさんのご意見を伺う機会がありましたが、親や兄弟が電通大の卒業生で、「この大学がいい」と選択した場合もあれば、特に希望した訳でもないが合格したので入学したという場合もあります。

しかし、入学のきっかけは人それぞれでも、後援会活動や大学の姿勢には一様に驚き、評価もしておられます。

教育、研究の質を高めるための設備の充実や先生と学生の関係の親密化を図る取り組みなど、確かに、学校と先生方が意識的な努力をしておられます。

今の保護者の年代の人にとっては、「学生は一人前の存在」（経済的には自立していないが）だったはずですが、今年の後援会総会で、先生から指摘もありました。今の学生は「子ども」だと思ふ必要があると。

では、その子どもたちに何をしてやれるのかが親には問われてきます。

今年の後援会総会で、福田理事長さんが、社会の土台は工学であるのに、日本の学生は工学志望が少ないと指摘されました。

確かに、数年前から子どもの理科離れが指摘され、文科省自身が基礎的な研究を軽視し、目先の「成果」で大学の研究費まで左右する

ような施策をとっているなかで、小中学校の子どもたちにじっくり実験や観察をさせて、理科への興味を深めることなど極めて困難であることは、教師ではない私にでも容易に想像できます。

そのツケが大学に回ってくるのですから大学も大変です。

競争も成績も現実社会には存在し、競争すべき時もあれば、成績で何かが左右される時もあります。学生など、まさに成績というのが価値をもつ時期であり、競争することが本分だと考える人もいるかも知れません。

しかし、人間社会では、競争でなく相互援助が求められるときがあり、数値化できる成績でなく、数量化できない価値観や感動こそが重要な意味を持つときもあります。

今、大学としてやりたいことがなかなか出来ない現状があるようです。後援会は、あくまでも縁の下の力持ちですが、何が力かと言えば、大学を応援することだろうと思います。

幸い、電通大では先生と保護者の懇談会なども毎年開催しています。学生本人が関わってもいいのですから、高校の三者面談の感じに近いと思いますが、そういう機会も含めて、保護者が大学と先生と学生と他の保護者のことを知り、後援会で意見交換をし、分からないことは聞いてみるなかで、何を応援すればよいかが見えてくるのかも知れません。